我が国の博物館創設事情をめぐって

矢島　國雄*

はじめに

江戸時代後期、18世紀後半、大坂の町人、木村孔恭[1]は、絵画（師は大岡春卜[2]・柳沢淇園[3]・鶴亭[4]・池大雅[5]）、儒学（師は片山北海[6]）、本草学（師は津島桂庵[7]・小野蘭山[8]）を学び、その居宅に書画本草のコレクションを作り、この屋に「蒹葭堂」の名を掲げた。孔恭は、この蒹葭堂をもって呼ばれるようになり、目利き、鑑定家としてもきこえた。

木村蒹葭堂は、浪華きっての文人として世評も高く、この「蒹葭堂」をいわばサロンとし、広い交友範囲を持った。文人墨客の往来は頻繁で、儒者・国学者・蘭学者・本草家としては建部綾足[9]、木内石亭[10]、中井竹山[11]、皆川淇園[12]、高山彦九郎[13]、海保青陵[14]、曾槃[15]、最上徳内[16]、大槻玄沢[17]、頼山陽[18]、画家や文人としては大典顕常[19]、売茶翁[20]、伊藤若冲[21]、与謝蕪村[22]、高芙蓉[23]、上田秋成[24]、円山応挙[25]、松浦静山[26]、浦上玉堂[27]、太田南畝[28]、司馬江漢[29]、青木木米[30]、田能村竹田[31]、谷文晁[32]、蠣崎波響[33]、らとの交友が記録されている。蒹葭堂は単なる好事家ではなく、コレクションについても「奇ヲ愛スルニ非ズ、専ラ考索ノ用トス」と書いているように、その収集の姿勢は学者のそれであった。このコレクションは書籍、書画、茶道具、本草資料と幅広く、かつ膨大であった。書籍は蒹葭堂没後、幕府の昌平坂学問所に納められ、その大部分は、現在は内閣文庫の所蔵となっている。本草資料の一部は、昭和44年に京都大学で発見され、昭和49年、大阪市立自然史博物館に寄贈されて現在にいたっている。

蒹葭堂一代の凱切な評伝は、中村真一郎『木村蒹葭堂のサロン』（新潮社　2000年）に尽くされているが、蒹葭堂は本草学者というより、博物学者であり、画人でもあり、文筆家、蔵書家であり、知のネットワーカーであったといえる。そして、この「蒹葭堂」コレクションとそのサロン活動は、西欧のルネサンス期から18世紀を通じて形成された数多くの私的コレクションである cabinet（イタリア風にいえば studioro、ドイツ風にいえば kunstkammer）と同じようなものであったといえるだろう。

こうした私的コレクションが公共のものとされ、万人に公開されて「知の社会化」のための社会的文化的装置となったものが近代西欧に発する museum（博物館）である。

日本の博物館の起源は、明治時代初頭期に西欧にならって創設されるのだが、江戸時代後期には、西欧における博物館前史によく似た状況が確認できる。以下、その概要を記すと同時に、それらの良く似た状況がありながら博物館が生み出されなかったのはなぜかと、わが国の博物館創設期にこうした状況がどのように反映しているものかを検討したい。

＊明治大学教授

1. 江戸時代の本草学

本草学

本草とは、東アジア世界において古代以来使われてきた薬剤·薬物のことであり、本草学とは、そのような薬剤・薬物について吟味する学問を指す。そうしたものの中心が植物であったので、本草という呼称が成立したものであろうが、しかし、その範囲は植物にとどまらず、医薬として利用される、あるいは薬効のある植物・動物・鉱物といった自然物を研究する学問となったと言った方が正鵠を射ているだろう。

このように自然物の研究という点では西欧における natural history の研究に等しいともいえるが、薬物に使用されるものという前提、もしくは限定の点で、自然誌学や博物学とは異なるといえる。

本草学の故地は中国で、神農にその端を発すという。もとよりこれは神話・伝説の類ではあるものの、古代中国以来の薬物に関する知識を取りまとめ、また新たな知見を探り、加える営みが続けられ、本草学が成立したといえよう。

このような本草学も、明代の中国の朱熹の学問の特徴のひとつ、すなわち格物致知・窮理の思想が影響を与え、博物学的思考、実学および経験科学への展開が生み出されたと西村三郎は指摘する（西村　1999：102－105)。李時珍の『本草綱目』に見られる本草学から博物学への変化もしくは拡大は、こうした当時の儒学、とりわけ朱子学の学問的な性格が準備したといえそうである。ここに至って、儒学者が同時に医師であり本草学者であり、医師や本草学者が同時に儒学者であるような、中国、日本に共通した学術世界が現出したといえる。

中国本草学の頂点ともいえるものは明代、万暦年間に公刊された李時珍の『本草綱目』[34]であることは異論がないところであろう。李時珍没後の1596（万暦24）年に金陵（現在の南京）で刊行されたものが最初で、舶載された『本草綱目』は、我が国の学術界に大きな影響を与え、林羅山[35]以降、本邦における本草研究の聖典ともいうべき地位を長く保った。

日本における本草学

日本の本草学の系譜をたどってみると、律令制下で輸入された本草学に始まるといえる。たとえば、「養老令」の典薬寮に関する定めには、医針生は「脈経」と「本草」を学ぶことが規定されている（『令義解巻第八医疾令』)。このときの「本草」のテキストは『本草集注』[36]であろうと上野益三は指摘している（上野　1973:211)。また、『続日本紀』には、787（延暦6）年、『本草集注』から『新修本草』[37]へと薬局方を変えるという記事が見られ、『延喜式』式部上にも、医生は『新修本草』を読むことを定めている（上野　1973：214・223)。10世紀の初めには、深根輔仁による『本草和名』が撰されているが、これは『新修本草』の漢名に対応する和名を考定し、邦産の有無を注したもので、日本初の本草辞典といえる（上野　1973：222)。同じ10世紀初め、動植物名も数多く収める源順による国語辞典、『和名類聚抄』が完成している。また、984（永観2）年には、丹波康頼により唐医学の集大成ともいえる『医心方』が編纂され、この中には唐本草の成果も盛られている（上野　1973：224)。とはいえこの後は、鎌倉時代後期、1284（弘安7）年の惟宗具俊（ともとし）の『本草色葉（いろは）抄』[38]以外見るべきものはなく、本格的な本草研究を見ることができるのは江戸時代になってからといってもよい。

江戸時代初期の本草学

林羅山は、舶載本の『本草綱目』を読み、後に『多識編』(1630(寛永7)年)、『新刊多識編』(1631(寛永8)年)、『本草綱目序註』(1666(寛文6)年)を著わしている。いずれもある種の解説・手引き書である。

1605(慶長10)年、羅山は藤原惺窩[39]に推され徳川家康に謁し、これを契機に家康に侍すことになり、幕府に登用されて御用儒者となる。1607(慶長12)年、家康の命により長崎に赴き、『本草綱目』を入手し、これを家康に献じている。上記の羅山の著作は、『本草綱目』の読解であるが、羅山自身は解読するのみで、自ら自然物を採集し、実物について調べることはしていないようである。つまり、本草そのものに関心があったというより、羅山の関心は事物とその名称を糾すことにあったというべきであろう。こうした学問を名物学と言う。それ自体は学問の基本であり、ゆるがせにできないものではあるが、実物に当たらないというのでは、ある意味で本格的な本草研究とは言えないもので、字彙論・語義学の範囲を出ていないとも評価できる。しかしながら、医薬に明るかった家康が座右の書としたこと、官許の儒学の総帥が依拠した書として、これ以降、李時珍の『本草綱目』を最も信頼できるテキストとして、これを学んだ多くの本草学者を生んでいく。

元和堰武によって平和と社会的安定がもたらされた17世紀から18世紀初めにかけ、『本草綱目』は我が国でも版行され、またこれを読む手引きの類もいくつも刊行されていることから、その影響の大きさを知ることができる。また種々の中国本草書も新たにもたらされ、本草研究が隆盛に向かい、稲生若水[40]、岡本為竹[41]らの本草書の刊行を見る。

そうした中で、1709(宝永6)年、貝原篤信(益軒)[42]の著した『大和本草』が『本草綱目』に学びながらも、我が国独自の本草学を生み出した大著と評価される(西村　1999:121－127)。益軒は福岡藩に仕えた儒者で、経験的な格物致知を重視し、晩年の『大疑録』では唯物論に達したともいわれる朱子学者である。こうした益軒の姿勢が反映して『大和本草』では、おおすじでは形状や性情に基づく李時珍の客観分類に異を唱え、学問は実用の学であるべきで、民生日用のための学問こそ尊いという学問観から、実用主義を根底とした人為分類を提唱し、それに従って、邦産の自然物を中心に1362種を取り上げ、その名称・来歴・形状などを記述している。

西村三郎は、「17世紀後半から18世紀にかけてわが国では、模範を中国の書に求めつつも、わが国独自の知識をも取り込んで、経験に立脚した実学的な啓蒙書が、さまざまなジャンルで数多く刊行された」(西村　1999:121)ことを指摘している。具体的には、益軒の『大和本草』と、これに先立つ中村惕斎(てきさい)の『訓蒙圖彙(きんもうずい)』[43]、寺島良安の『和漢三才圖絵』[44]、宮崎安貞の『農業全書』[45]を頂点とする各種の農書、人見必大の『本朝食鑑』[46]などをあげ、経験に立脚した実学的啓蒙書が盛んに刊行されたが、これらは「わが国固有の知識を盛り込んで百科全書的に取りまとめようという意図がこの時代に発生した」(西村　1999:120)ことを示すと注意している。益軒は宮崎安貞と親交があったことにも表れているように、実用の学に立脚して、当時の我が国の儒者の多くが道とか人倫の問題に集中し、あるいは先験的名分論に立っていることに批判的であった。いわば朱熹の学問の唯物論的な側面を自らの道とし、かつ実用主義に立ったといえるだろう。その表れが、今日なお人口に膾炙する『養生訓』であり、『大和本草』であったといえよう。

江戸時代中期・後期の本草学

江戸幕府中興の祖ともいわれる徳川吉宗は、世に言う享保の改革を主導したが、林良喜[47]、植村正勝（佐平次）[48]、丹羽正伯[49]、野呂元丈[50]、阿部将翁[51]などを集め、1720（享保5）年以来、全国的に採薬のための調査を行わせた。この調査は吉宗没後の1753（宝暦3）年まで続いたという。また、対馬藩に朝鮮の鳥獣草木の調査を命じ、野呂元丈に命じてレンベルト・ドドエンスの『草木誌』（Rembert Dodoens "Cruydt-Boeck"）[52]を翻訳させている。また、経済政策の一環として、殖産興業を企図し、全国の産物調査を1734（享保19）年から始める。さらに、稲生若水が編纂に着手したものの、完成を見ずにその死によって中断していた『庶物類纂』の完成を丹羽正伯に命じた。また、市井に在った本草学者の京都の松岡恕庵[53]、江戸の田村藍水らも召出して、本草研究にとどまらない物産研究を推進した。

田村元雄（藍水）[54]は、江戸の市井の医師であったが、朝鮮人参の栽培に心血を注いでいた。1748（寛延元）年、『人参耕作記』を著す。幕府に召出された藍水は、日光今市の人参耕作地の管理に責任を持つことになる。この藍水は、植村佐平次、野呂元丈、阿部将翁らの採薬行を間近に見聞きしながら出仕し、また自らも採薬行を行った。こうした経緯で、実地の採薬、つまりフィールドワークを重視し、具体的な資料に立脚した学風の藍水を始祖とする江戸の本草学派が生み出されたといえよう。これに対し、松岡恕庵、小野蘭山、山本亡羊と受け継がれていく京都を中心とした学派は名物学的で書斎派の色彩が強かった。

ところで、このような本草学、あるいは物産学の興隆は、「本草会（え）」、「薬品会（え）」、「物産会（え）」などと呼ばれる本草資料の展覧会を開くまでになる。

上野益三によれば、1751（宝暦元）年頃、京都の松岡恕庵の高弟であった津島恒之進（如蘭）が、浪華の戸田斎（旭山）[55]の「百卉園」を訪い、本草会を開くようになったという（上野 1991：52）。そして、これが薬品会、物産会の先駆であろうという。1754（宝暦4）年、讃岐高松藩を離れた平賀源内は、江戸へ下る途次、この旭山戸田斎のもとに立ち寄り、医学修業の師とした。この時既に如蘭は浪華に客死していたが、その本草会のことを旭山から聞き知ったと思われる。江戸へ下った源内は、田村藍水を知り、師礼を執る。源内は高松において久保桑閑に本草を学び、藩主松平頼恭（よりたか）に見出され薬草園の係りとなり、1752（宝暦2）年には長崎に遊学、1754年に願いを以って役を離れ、本格的な本草の研究に進んだ（1759（宝暦9）年、江戸で、薬坊主格で復職）。藍水に就いた頃には既に一人前の本草学者であり、また長崎で学んだ新来の知識を持っていたといえる。その源内が藍水に勧めて開いたのが江戸における薬品会である（上野　1991：53）。

この初の薬品会は、1757（宝暦7）年、田村藍水を会主として湯島で開かれたもので、以後、4回の薬品会が知られている。翌年の薬品会も藍水を会主として神田で開かれ、第3回目は源内を会主として湯島で、第4回は藍水門下の松田長元を会主として市ヶ谷で開かれた。この第2回から第4回の薬品会の出品物の記録が、『會薬譜』（平賀国倫（源内）編）として残る。そして、一年おいて1762（宝暦12）年には、源内が主催して「東都薬品会」を湯島で開いている。源内は、この「東都薬品会」とこれに先立つ4回の薬品会の出品物から360種を精選し、解説を付した『物類品隲（ひんしつ）』全6巻（1763（宝暦13）年）を刊行している。

これは、戸田旭山の1760（宝暦10）年の薬品会の記録として刊行された『文會録』に倣ったものである。旭山の薬品会は、江戸の薬品会に刺激された本家が力を入れて開いたもののようで、全国規模で出品者を求め、京・大坂はもちろん中四国、江戸、北陸、東北から100人もの

同好者が208種もの逸品（会主旭山の出品を併せると241種）を持って馳せ参じ、列座の出品者で互いに真偽をただし、名を決定したという（西村　1999：136）。

『會薬譜』が、出品者名簿と出品目録を出なかったのに対し、『文會録』は、品目、出品者に加え簡単な解説を付すことと、出品物中の珍品については画工に絵を描かせ、掲載していることが重要である。これが、源内の『物類品隲』となると、より詳細な解説を付すとともに、1巻を割いて40図よりなる産物図絵を持つ点で、『文會録』より、より徹底した記録であり、本草書となっており、当時の我が国の博物学の水準を推し量ることのできるものとなっている。

こうした物産会は、この後定着し、1781（天明元）年以降、幕府医官多紀氏の躋寿館が、後に幕府の医学館が、毎年、物産会を開く。これは、田村西湖[56]とその門人たちが中心となったものだが、この他、江戸では、岩崎常正（灌園）[57]、阿部喜任（榛斎）[58]、福井春水らが物産会を開いている。その様子は、寺門静軒の『江戸繁盛記』（1832-36（天保3－7）年）に見える。また、京都では、山本亡羊[59]、山本榕室父子が家塾「読書室」で1808（文化5）年から通算50回、60年にわたり物産会を開いている。また、『尾張名所圖会』（1844（弘化元）年）には、尾張藩奥医師浅井紫山[60]が中心となった尾張藩医学館の薬品会の様子が描かれている。

初期の薬品会は出品者が資料を持ち寄り、この人々がお互いに資料の鑑定・同定を行い、その名や真偽を討論するというもので、一般参会者はいない。今日の研究会的な学術集会であって、飲食なども厳しく制限していて、親睦や懇親などを目的としたわけではない、かなりストイックな学術的な集まりであったようだ。しかし、次第に一般の参会者にも観覧を許すようになっていったあたりから、珍品奇物の展覧会の様相を呈してくる。寺門静軒の描く物産会は、まさにそのようなものである。

こうした薬品会や物産会に資料を持ち寄ったのは、いわゆる学者ばかりでなく、市井の好事家やコレクターをも含んでいる。たとえば、近江の木内小繁（石亭）は弄石家と呼ばれたように、一部に考古資料をも含んで石（岩石・鉱物）のコレクターとして著名であったし、浪華の木村孔恭（蒹葭堂）も、前述のように貝類、奇石、書画、茶道具類などのコレクターであった。

また、大名や武士にも本草研究に傾倒した者は数多く、大名には絵師に命じて各種の本草資料の図譜を作らせたり、中には自身で描いたりしている者がある。絵師に命じて図譜を描かせた大名には、例えば、平賀源内の主であった讃岐高松藩主松平頼恭（『衆芳画譜』『写生画帖』『衆鱗圖』『衆禽圖』）、肥後熊本藩主細川重賢（『蟲類生写』『昆蟲胥化圖』『鳥類圖譜』『毛介綺煥』『錦繡聚』『衆芳圖』『草木生写』『花木形状』）などがおり、重賢は自身でも『押葉帖』『三千之枝折』と名付けた腊葉標本帖も作成している。自身で絵も描いたのは　出羽秋田藩主佐竹義敦（曙山）（『龍亀昆蟲写生帖』『模写並写生帖』）や、伊勢長島藩主増山正賢（雪斎）（『蟲豸圖』『長洲鳥譜』『百鳥圖』『草花写生圖』）がいる。また、島津藩主島津重豪は田村藍水に資料を与え、『琉球産物誌』をまとめさせ、曾槃（占春）と白尾国柱[61]に命じて『成形圖説』を撰している。さらに、越中富山藩主前田利保は「赭鞭会」[62]と名付けた博物同好会を江戸で組織している。幕府医官の栗本丹州[63]をいわばコンサルタントとし、同好の大名や旗本・藩士が集ったもので、旗本では、『遠西舶上花譜』『群英類聚圖譜』『貝譜』『蟲譜』を著した馬場大助[64]、『竹譜』『六百介品』『甲介群分品彙』『目八譜』『介殻稀品撰』を著した武蔵吉恵[65]らがメンバーであった。栗本丹州自身にも『本草存真圖』『魚譜』『貝譜』『蟲譜』などの図譜がある。

このような結社は、いわば西欧のルネサンス期以来の私的なアカデミーに比すことができる。博物図の盛行などとともに、同時期の西欧と並行する興味深い現象である。江戸の他にも、尾

張名古屋では、「嘗百社」[66]と名付けられた尾張藩士および医師等からなる結社があった。リーダーは水谷豊文[67]で、メンバーとしては大河内存真[68]・伊藤圭介[69]・大窪太兵衛・昌章・吉田高憲（雀巣庵）などが知られている。また、京都の小野蘭山の塾などもある意味で本草学の結社のようなものということもできる。冒頭で触れた木村蒹葭堂の活動もこの時期のものである。

そして、物産会と直接的につながるものとは必ずしも言えないものだが、市井の出開帳、見世物などとも類縁を持って、鹿茶屋、孔雀茶屋、珍物茶屋などが見られるようになる。同じ頃、イギリスではコーヒーハウスが隆盛し、中には種々のコレクションを持って同好の士の溜まり場となっていたものなどがあるが、上記の茶屋は、その寿命は明らかではないが、さほど長い流行ではなかったようだし、ある種の社会的な集団の拠点となるようなこともなかったらしく、コーヒーハウスのような社会的な位置を持つには至らなかったようだ。

西村三郎は、この時期の本草研究を特徴づける博物図譜の盛行、物産会の盛行は、同時代の江戸の文化としての絵入り本、浮世絵、物尽しなどの盛行と無縁ではないことや、本草学とは必ずしも同根とはいえないが、植木園芸の流行とその巧緻な技術の高揚、虫鳥などの小動物の飼育愛玩の流行などにも注意すべきことを力説している（西村　1999：168－185）。

やや時期は前後する部分もあるが、1799（寛政11）年、京都の本草学者小野蘭山が幕府の召出しによって、江戸の医学館に赴任する。当時の医学館の医師で江戸本草学の中心にいたのが栗本丹州である。

この江戸における蘭山の講義を記録したものとして『本草綱目啓蒙』（1803-06（享和3－文化3）年）がある。『本草綱目啓蒙』は、『本草綱目』の解説書といったものではなく、益軒以後の我が国の本草学者、物産学者、園芸家たちの集積した知見を集大成したものである。本草書というよりは、浩瀚な博物学書といった方がよいもので、蘭山の慎重で合理的な精神に貫かれ、我が国の本草学が当時までに到達した水準を見事に示すという。しかし、個々の品目については緻密で詳細な記述がなされている半面、品目全体を通じての概観もしくは本草－博物学の体系についての蘭山の考え、わけても品物の分類・配列に関して彼自身の見解ないし主張は全く示されていないともいう（西村　1999:453－457）。こうした傾向は我が国の本草－博物学、特に江戸後期に目覚ましく展開した博物学にひろく通底する性格だったと西村三郎は言う（西村　1999：457）。

蘭学と本草学

江戸中期以降、長崎が医学を中心に蘭学のメッカとなったことは周知のことである。長崎の商館に派遣されてきた医師の中には、博物学に通じたものが何人かいた。

早くは元禄年間に来日したエンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kaempfer）[70]がおり、その旅行記『廻国奇観（Amoenitatum Exoticarum）』（1712）や没後に刊行された『日本誌（The History of Japan）』（1727）に、日本の動植物に関する記述がある。ただし、このケンペルの著書は、当時の我が国の本草研究者は知ることがなかったようで、ほとんど何の影響も及ぼしてはいないようだ。

次いで、我が国でも本草学研究が高揚し、ほとんど博物学といえる様相を呈していた時期に来日したのが、リンネの高弟、カール・ペーテル・ツュンベリー（Carl Peter Thunberg）[71]である。1775（安永4）年から翌年まで約1年4カ月と滞日は短かったが、小浜藩医中川淳庵、幕府医官桂川甫周は、安永5年のツュンベリー江戸参府中、宿舎長崎屋に日参してヨーロッパ

の最新医学とともに植物学、物理学、地理学などにおよぶ知識を教授されている。ツュンベリーは帰国後、淳庵に医学書などを送っているが、自著『日本植物誌（Flora Japonica)』(1784）は淳庵らの手には届かなかったらしい。この二人は『解体新書』の翻訳に加わっており、ツュンベリーに会ったのはその刊行から２年もしないうちだった。『日本植物誌』が淳庵らの手に渡り、翻訳が行われていれば、リンネの学説が、この時期に知られるようになっていただろうと思われるが、これは実現しなかった。

リンネの学説の紹介として最初のものは、1,822（文政５）年の宇田川榕庵[72]による『菩多尼訶経』である。これはマルティヌス・ハウトイン(Martinus Houttuyn)[73]の『自然誌 (Natuurlyke Historie of Uituoerige Beschryving der Dieren, Planten en Mineraalen, Volgens het Samenstel van den Heer Linnaeus)』(1761－85）などを参照して描かれた西欧植物学の概説で、経文体1178字のものであるが、この中にリンネの分類体系への言及がある。

この宇田川榕庵は、宇田川玄随（槐園)[74]、玄真（榛斎）[75]、榕庵と続いた津山藩医宇田川家の医師でともに語学に堪能であったという。玄随は桂川甫周、大槻玄沢にオランダ語を学び、ヨハネス・デ・ホルテルのオランダ語内科書を翻訳して、『西説内科撰要』(1793（寛政5）－1810（文化7）年）を版行する。初の西洋外科書の翻訳であった『解体新書』に対し、初の西洋内科書の翻訳である。養子の玄真も甫周、玄沢に学び、稲村三伯が編んだ我が国初の蘭日辞典『波留麻和解』(1796（寛政8）年）に協力している。この玄真は、『和蘭内景医範提綱』(1805（文化２）年)、『内象銅版圖』(1808（文化5）年）を著し、養子榕庵の助力を得て『和蘭薬鏡』(1819（文政2）年)、『遠西方名物考』(1822－25（文政5－8）年）を刊行した。この２書では、ドドネウス『草木誌』、ペトルス・ニーランド（Petrus Nylandt）の『ネーデルランド草木誌（De Nederlandtse Herbarius of Kruydt-boeck.)』(1682)、ステファン・ブランカールト（Stephen Blankaart）『ネーデルランド草木誌（De Nederlandschen Herbarius, or Kruidboek der vornaamste kruiden, tot de medicine, spysberidingen en konstwerken dienstig.』(1698)、ヨハン・ヴィルヘルム・ワインマン（Johann Wilhelm Weinmann）『顕花植物図譜（オランダ語訳版）(Taalryk Register der Plaat-ofte Figuur-beschryvingen der Bloemdragende Gewassen)』(1738－1802)、ノエル・ショメール『日用百科事典』、『ネーデルランド新薬局方』、『アムステルダム新薬局方』などが参照されているという（西村　1999：481－483)。

このうち、ノエル・ショメール（Noël Chomel)[76]の『日用百科事典』は、オランダ語訳再版本 Huishoudelyk Woordboek（1768－77）で、ヘンドリック・ドォーフ（Hendrik Doeff)[77]が1810（文化7）年、江戸参府の折に持参したものを幕府が買い上げたものである。幕府天文方の高橋景保が、その翻訳を建議し、医療・食物・動植物・鉱物・産業・地学・理化学などの項目を選んで訳を進めた。翻訳にあたったのは、馬場佐十郎、大槻玄沢、大槻玄幹、宇田川玄真、宇田川榕庵、小関三英、湊長安で、1811（文化8）年から1845（弘化2）年までと、かなり長期間かかっている。この訳書『厚生新編』70巻は、結局刊行されないままとなる[78]。また、松平定信の命を受けてドドネウス『草木誌』の訳も始まり、1821（文政4）年頃には翻訳は終わっていたようだが、この『遠西独度涅烏斯草木譜』も刊行は頓挫した。

ケンペルもツュンベリーも、その残した影響は大きくなかったが、1823（文政6）年に来日したフィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold)[79]は、シーボルト事件によって国外退去を命じられるまで6年5ヵ月間滞日し、鳴滝塾を開き、当時最新の西欧の医学、博物学、薬学などの教授を行い、多くの門弟を育てるなど、

我が国の蘭学界に大きな影響を残した。

鳴滝塾は、1824（文政7）年6月に開かれたが、これに先立って、通詞吉雄権之助、蘭方医楢林栄建・宗建が、教授の場として家塾の使用を申し出、医学、博物学、薬学の講義と実地指導が行われていたようで、本格的な教場が求められて鳴滝塾が開設されたものである。吉雄と楢林に加え、その門下生、湊長安[80]、美馬順三、岡研介、伊東玄朴[81]、二宮敬作[82]、高良斎たちがシーボルトに学んだ。鳴滝塾では、医学、外科学、動植物学、薬学をシーボルトが、理化学、鉱物学は助手ハインリッヒ・ヴュルゲルが教えたという（西村　1999:497）。医、薬物、動植物、民俗、産業、地理などについて門人に調査させ報告を求めるという勉強法がとられたといい（西村　1999：497、上野　1973：481-482）、これはシーボルトにとっては、同時に情報、資料の収集でもあったといえる。1826（文政9）年、商館長の江戸参府に随行し、その旅の途次、各地で動植物や物産を収集したのは、ケンペル、ツュンベリーと同様であるが、尾張熱田で水谷豊文、大河内存真、伊藤圭介と往復2回会見している。江戸では桂川甫賢、宇田川榕庵、大槻玄沢、天文方兼書物奉行高橋景保、最上徳内、間宮林蔵等と会う。徳内や景保から入手した図書や地図類が後に問題となり（シーボルト事件）、景保は獄死、シーボルトは国外退去となる。

熱田での会見を契機として伊藤圭介は長崎に赴き、シーボルトから学ぶことになる。シーボルトと圭介は腊葉標本の同定に力を注ぎ、豊文の『物品識名』を基にこれに学名・和名を充てて研究をすすめたという（西村　1999：500）。別れに際し、シーボルトはツュンベリーの『日本植物誌』を圭介に贈る。圭介は後の1829（文政12年）年、この『日本植物誌』を訳述し、『泰西本草名疏（めいそ）』を上梓する。リンネ体系に従って日本の植物相を明らかにしたツュンベリーの『日本植物誌』を土台とした日本人に手になる初の近代植物分類書といえる。その附録において「二十四綱解」としてリンネの分類体系を解説している。ただし、圭介は西洋植物学と本草学の根本的な違いは良く理解していなかった疑いが濃いと西村三郎は指摘する（西村　1999：503）。例えば、ツュンベリーのリンネ体系に従った配列や秩序をばらして学名のアルファベット順に並べかえたことはほとんどまったく意味のないことであったとする。

これに対し、宇田川榕庵の『植学啓原（しょくがくけいげん）』（1834（天保5）年）は西洋植物学の通論であり、器官学・形態学・生理学・植物化学について述べる。リンネ分類については圭介にゆだね繰り返さないとして多くは触れていないという（西村　1999：507）。榕庵の関心は「弁物」（記載と分類）の段階である博物学や分類学を超えて、医学や生理学の「窮理」（法則研究の段階）、化学の「舎密」（法則の由縁を研究する）段階にあったという（西村　1999：509）。当時の我が国で、西欧の近代科学の本質を明確に理解した数少ない人が榕庵であったことは、書名が「本草」ではなく「植学」という用語を新たに造語していることからも窺える。長い本草学の伝統から離れ、新たなパラダイムのもとで植物学研究をしようという意識が明確である。こうした榕庵の考えに対し、伊藤圭介は、ほとんど何の反応も見せていない。両者にはかなり親密な交流があったようだが、圭介は相変わらずひたすら個物を博捜するのみで、リンネ体系を紹介はしているものの、それに沿うような理論化や体系化への志向は見られないまま、旧態依然たる本草学の枠組みを出なかったようである。ただし、その個々の植物に関する知識はシーボルトも驚嘆し、後の明治期の大学出仕時代に出会う外国人教師をも驚嘆させたほどで、個物についての該博な知識は右に出るものがいなかったといってよいようだ。

江戸時代本草学の特徴

江戸時代の本草学の特徴をまとめると、中国本草書の『本草綱目』をいわば聖典として、それを解読すること、中国本草書にあるものが邦産のどれにあたるのかを考究することとともに、これに我が国固有の動植物や各種物産を加える営為が連綿と続けられたことがその中心となっている。林羅山以来の特に文献考証的な研究は、どちらかといえば医師であるより儒者であった者たちと、京都を拠点とした本草学者たち、稲生若水、松岡恕庵、小野蘭山、山本亡羊といった系譜で、その研究を深めた。一方、徳川吉宗による殖産興業政策の一環をなす形で進められた実学的な本草研究の系譜は阿部将翁、田村藍水・西湖、栗本丹州といった系譜で、実地のフィールドワークを重視した邦産の物産研究の色彩を濃く持った。

博物館というものとの関わりで注目しなければならないのは、これらの本草学者たちや同好の者たちの多くが、いずれも何らかのコレクションを形成したということである。木村蒹葭堂の事跡にも明らかなように、彼らはこうしたコレクターのもとを訪れ、ある種の学術的な交流・交感を行っている。実はこうした現象は、ルネサンス期以降の西欧各地につくられたキャビネットやクンストカマーと呼ばれるコレクションと、その周辺で起こった現象ときわめてよく似ている。さらに、本草研究に関心を寄せた身分を異にする人々が、階級や階層を超えて集い、学術的な交流を目的とする団体を形成していることも、ルネサンス期以降に盛行する各種の私的アカデミーなどの学術団体の結成と近似的である。

しかしながら、我が国では、薬品会とか物産会と呼ばれた展覧会は盛行したが、継続的にコレクション形成は進められたにしても、それを展示するような特別の施設が形作られることはほとんどなかった[83]。これに対し、西欧ではコレクター自身がコレクション整備を進め、ジョン・トラデスカントの事跡のように、「トラデスカントの箱舟」として自身のコレクションを公開するものがいくつも出現する一方、コレクションを持ち寄って、テンポラルな展覧会を開くというようなことはあまり見られないようだ。我が国でコレクションの収蔵・展示の施設が発達しなかったのは、おそらくは室町期以来の書画、茶道具等の扱いと関わりがあり、常時、コレクションを展示したような状態で管理するのではなく、通常は箱に入れて収蔵し、時に応じて飾り、使用するためにとりだすといった作法が、本草のような資料の場合にもとられたことによるとも考えられる。

欧米においても18世紀後半以降、都市においては珍奇なもののコレクションが市井の見世物としてもてはやされるが、我が国の場合もほとんど同断で、社寺の出開帳から始まった市井の見世物は、園芸市や物産会も含め多様なものが現れた。しかも、収益重視の経済行為に傾いていく時、それらが次第に通俗化していくことも同様であった。

このように本草学とその周辺を見ても同時期の西欧ときわめてよく似た現象が見いだせるものの、彼我には一方で大きな違いもあった。西欧では、宗教改革を経て個人の権利についての覚醒が進んだことと、神の御技を証明せんとして進んだ科学が結果的にあらゆるものを神から解放することになり、近代合理科学が確立したが、我が国においては神と人や社会との確執は起こらず（古来より形成されてきたわが国の宗教観では、ある意味で起こりえないことでもある）、儒教を含めて大きくは中国的な学術のパラダイムから脱することがなかったし、その要求も生じなかったといえる。しかし一方では、原理はさておいて極めて現実的で実用重視の性向が形成・維持されていたといえる。

幕末・明治初期における西欧の科学技術の導入にあたっても、実に精力的に種々のものや技

術を導入しながらも、基礎となる理論や体系性に弱点があったことの淵源はここにあるのであろう。上述のように宇田川榕庵と伊藤圭介という親交を持った二人が、実は全く思想的な立脚点を異にし、目指した方向も異なりながら、現実には全く対立や対決は起こっていない。榕庵が早すぎたのだと行ってしまえばそれきりではあるが、西欧の博物学を一定程度理解したと思われる伊藤圭介ですら、『本草綱目』以来のパラダイムから脱却することはできておらず、むしろ、江戸時代を通じて蓄積された個物に関する博覧強識の最高峰となっていたことが、江戸期の本草学、科学の到達点をよく示しているということができる。

2. 蘭学－洋学と博物館

博物館というものがいつ我が国に知られるようになったのかということについては、1860（万延元）年の遣米使節団の残した日記等から、これが最初だったというのが現在の博物館史の定説となっている。しかし、museum あるいは kunstkammer というものは、蘭学－洋学の系譜の中で、その語と意味が知られていたことは、薹由子によって明らかにされている（薹 2010）。遡って既に椎名仙卓による言及もあったとはいえ、実際の辞書の各項目をとりあげて明示したのは薹によるものが最初といえよう。

我が国初の蘭日辞典は、稲村三伯[84]が編んだ『波留麻和解（はるまわげ）』（1796（寛政8）年）である。またこれに続いた『ドゥーフ・ハルマ』は長崎オランダ商館長のヘンドリック・ドゥーフが編んだものである。これは、幕府の要請を受けて1816（文化13）年から長崎通詞の協力の下で本格的な編纂に入り、ドゥーフ帰国後の1833（天保4）年に完成したものである。『波留麻和解』を『江戸ハルマ』、『ドゥーフ・ハルマ』を『長崎ハルマ』と呼ぶことがある。

両方の『ハルマ』は、当初いずれも筆写本しか作成されなかった。いずれもリシュレ（César-Pierre Richelet）[85]のフランス語辞典をもとにフランソア・ハルマ（Francois Halma）[86]が編纂した蘭仏辞典、仏蘭辞典をもとに訳出されたもので、『波留麻和解』と『ドゥーフ・ハルマ』ではとられた単語に違いがある。その用例については『ドゥーフ・ハルマ』ではとられているが、『波留麻和解』ではほとんどないようである。三伯らが日本人で、もっぱら単語の意味を重視したのに対し、ドゥーフは、自身が使っている言葉であることから、日常必要とされる語を中心に選び、またその用例を重視したといえそうである。

『ドゥーフ・ハルマ』については、幕府医官で蘭学者の桂川甫周が刊本を幕府に働きかけたが、許可は得られなかった。刊本の許可はペリー来航後の1854（安政元）年に得られ、甫周は、翌年に他の蘭語辞典なども参照し、校訂増補を加えた『和蘭字彙（おらんだじい）』を刊行し始める（最終刊行は1858（安政5）年）。また、『波留麻和解』についても、三伯の弟子の藤林淳道が、収録語を精選して減らし、必要な語で欠落しているものを補って、1810（文化7）年に『訳鍵』を刊行している。

これらの辞書には museum という用語はないものの、konstkamer（konßtkamer）という単語が採られている。ハルマの仏蘭辞典には cabinet の項があり、この中に「高価な絵画、珍しい陶器、その他珍しいものがある屋敷の中の場所。書斎。研究のためにこもる」（薹由子訳）とあり、cabinet に対応する語は konßtkamer となっている。同じハルマの蘭仏辞典では、konßtkamer は「絵画その他珍しいものを納めている場所、キャビネ・ド・キュリオジテ」（薹由子訳）となっている。この konstkamer（konßtkamer）が『波留麻和解』『訳鍵』『ドゥーフ・ハルマ』『和蘭字彙』では次のようになっている[87]（薹　2010）。

蘭学辞書　1798-99（寛政10－11）稲村三伯『波留麻和解』
Konstkamer　圖書の府
1810（文化7）藤林淳道（普山）『訳鍵』
Konstkamer　圖書の府
1833（天保4）Hendrik Doeff 『ドゥーフ・ハルマ』
Konstkamer　珍品器物ヲ入ヲク処
1855（安政2）桂川甫周『和蘭字彙』
Konstkamer　珍品器物ヲ入レ置ク所
英和辞書　1859（安政6）堀達之助『英和対訳袖珍辞書』
museum　学術ノ為ニ設ケタル場所（学堂書庫等ヲ云ウ）

これを見ると三伯の『波留麻和解』、藤林の『訳鍵』では、「図書の府」となっている。書斎の意からこのように理解し、ほかの記述は理解が及ばず切り捨てたものかと思われる。ちなみに、この「書斎」は、おそらくはイタリアにおけるステュディオーロを指したものではないかと考えられ、訳者たちの理解した意味での書斎とは異なる可能性がある。さすがにドゥーフは実際を知っていることから、クンストカマーの本来の様子を表したといえる。ちなみに、幕末の英和辞典では当然のことながら cabinet や kunstkammer ではなく museum の語が採られているが、その訳の内容からは博物館の実際の様子を理解することは難しく、図書館と誤認するようなものとなっている。

いずれにせよ、このようにクンストカマーやミュージアムという言葉は知られていたが、当時の本草学者・蘭学者・洋学者が、キャビネット（cabinet, kunstkammer）や当時、西欧各地に相次いで創設されていた博物館（museum）というものを認識していたか、理解していたかということになると、大いに疑問だと言わざるを得ない。当時の我が国には、その考え方や内容を同じくするものがなかったので無理からぬところである。1860（万延元）の遣米使節団以後となると、博物館（museum）を実見してきた者がおり、またその話を聞くことができ、おそらくは認識も変わり始めていたものと思われる。1863（文久３）年頃には、洋書調所においてオランダの雑誌の翻訳書として『官板玉石志林』が刊行されるが、この中には大英博物館、ベルリンの国立博物館、パリの自然史博物館についての記事がある。翻訳者は箕作阮甫[88]と思われる。

3. 物産会と博物館

江戸時代、各大名家や武家、学者や上層農民、富裕層の商人などの中に書画骨董、珍品奇物を収集するものが現れたことは驚くにはあたらない。時代や地域を問わず、社会的な安定期にはどこでも見いだせる傾向である。しかし、こうしたコレクション形成にとどまらず、それぞれの分野での同好者による相互研鑽、情報交換などのための団体結社の創設が進んだということが注意される。身分や職業、性別に関わらず、同好の士ということだけをもって組織され、しかもそのことに最も達したものが、これまた身分・職業・性別に関わらず中心的な主催者となるゆるやかな集団がいくつも結成されている。○○社、○○連、○○会などと呼ばれる集団結社で、学術文芸、歌舞音曲から神信心にわたる広範な領域に認めることができる。

本草学に関わっては、宝暦年間に始まった本草会、薬品会、物産会と呼ばれる一種の展覧会や「赭鞭会」が、実に興味深い。

1760（宝暦10）年の戸田旭山による浪華での薬品会では、京・大阪のみならず、和歌山、岡山、高松、美濃、尾張、江戸、越中、南部という広範囲から合計241種の出品があり、当日参会する者100名という記録がある。会主の旭山を除いて、出品者は各人2品までと限ったことから、参会者の数の割には出品総数が少ないが、これは会場の広さゆえの制約だったようである。なかには遠隔ゆえ参会はしないものの出品物のみを送致したものを含んでいるが、全国規模で出品を乞い、当日100名もの本草家が出品物を持って集ったということは、当時の交通事情を考えると驚嘆せざるを得ない。1762（宝暦12）年、平賀源内が開いた第５回の東都薬品会では、前年より準備を始め、より徹底的、組織的に全国から出品を乞うた。全国に諸国産物取次所（18カ国、25カ所という）を設けて出品者はここから江戸に出品物を送れるようにした。出品物は、この取次所から江戸・京・大坂にそれぞれ置いた産物受取所に集められ、この産物受取所から湯島天神の会場に開催日に届けるというものであった。旭山の場合のように原則は出品者が持参するという形を改め、より多くの出品を確保したのである。出品物の総数は1300余種、そのうち100種は田村藍水と平賀源内の出品であった。つまりは、1200余種もの本草資料が全国各地から江戸に集められたのであり、空前絶後というべきものである。同時期の西欧でも、この規模の博物学資料の展覧というのは、おそらく例のないことであろう。江戸時代における本草学研究、あるいは珍品奇品のコレクションという流行の広がりを明らかに示すものである。

学術的な見地からすれば、両薬品会ともに、図録が編纂されていることも極めて重要で、特に源内の『物類品隲』は、当時の本草研究の到達点を遺憾なく示しているものと評価されている（西村　1999：144）。

こうした初期の薬品会や物産会は、基本的には同好の士が、自己の所有する資料を持ち寄り、研究・評価・情報交換をするという、かなりストイックで学術的なものであったが、次第にいわゆる見世物化したことは前述したとおりである。こうした動向は、同時期の江戸の各種の見世物文化と深くかかわるものである。例えば、当初は信者の拡大、大衆教化を目的として行われた社寺の開帳・出開帳が次第に経済活動としての側面を強め、特に都市地域における娯楽の一翼を担って、ほかの各種の見世物などと相まって盛り場を現出していくとされているが、物産会もある意味でその一つとなっていくといえる[89]。

このような催しは、その技や成果を展覧する園芸市や○○比べ（競い）などを含めて、江戸時代後半期にはかなり広範な領域で定着する。さらに、これらの催しは、一枚物から冊子体のものまである絵入りの印刷物（ちらし、番付、物尽くし、図録など）が、浮世絵や書籍と同様、木板印刷によって刊行・頒布されているのも大きな特徴である。江戸時代の絵入りの印刷物は、大衆のための日用の辞典や各種の手引を含めて数多く、こうした実用啓蒙書の盛行も含めて、江戸時代文化の大きな特色といえるであろう。西欧においても、木口木板技術、銅版や石版印刷の技術が確立され、同時期の印刷物に、以前とは比較にならない精巧な図がつけられ、より具体的な理解を確実にしたことと、ある意味パラレルである。こうした書籍のうち、オランダ商館によって舶載されたものの挿絵から、西欧における遠近法表現が注目され、いわゆる秋田蘭画が成立し、また亜欧堂田善、司馬江漢の画が登場することになった。

このような、特に都市域を舞台とした社会の動向は、同時期の西欧の都市域に見いだせる動向ときわめて近似的である。しかしながら、物産会という催しが定着し、幕末に至るまで数多く開催されてはいるものの、これを恒常的に展観して公開するという考えは全く生まれなかっ

た。本草学に限らず、さまざまな分野で生まれた数多くのコレクターたちも、木村蒹葭堂のような例はあるとはいえ、一般的にはそれを広く公開するような挙に出るものはあまり認められず、せいぜい同好の結社中くらいの範囲にとどまっていたようである。いわんや、幕府や藩が公的な形で書籍や物を集め展示観覧、利用させるような仕組みは全く生み出されることはなかった。

先にみたように、蘭語・蘭学に通じた者たちも西欧における konstkamer（kunstkammer）は理解できなかったようであり、『ドゥーフ・ハルマ』では、ほぼ正確な意味内容が伝えられてはいるものの、やはりその実際を知ることはできなかったようである。幕末に至って、museum を実見した者が出てくるまで、「博物館」というもの、その意味や社会的役割は理解の外であったというほかない。

このことは、例えば本草学の歴史を振り返る中で指摘したように、西欧の新知識はその個物・技術については実に精力的に摂取している一方、その基本となっている学理や理論の体系などについてまで理解しようという意識が極めて弱かったことと無縁ではないであろう。

4. 明治初期における博物館の創設

すでに周知のように、我が国における博物館の創設は、1867（慶応3）年、パリで行われた万国博覧会[90]に出張した幕府の田中芳男[91]、薩摩の町田久成[92]、佐賀の佐野常民[93]が明治新政府に出仕し、その建言によって、1871（明治4）年、大学南校物産局によって博覧会を開催することから始まったといえる。この博覧会は、「大学南校物産会」の名で九段坂上の招魂社で行われた。後には、この九段の旧薬園地を恒常的な博物館とする構想があったが、これは実現しなかった。この博覧会は江戸時代以来の「物産会」を冠していることでもわかるように、開催者自身の意識や、その内実を含めて「物産会」の域を出るものではなかったといえる。この時期、新政府の機構は次々改組が重ねられ、名称もその都度変化するので実に煩雑だが、同年に大学が廃止され文部省が設置され、その中に博物局が新設され、大学南校物産局を引き継いだ。そして、湯島聖堂の大成殿を博物局の展覧場と定め、翌1972（明治5）年、文部省博物館の名で博覧会を開き、閉会後も寄託された資料によって展示を公開した。一般には、これを持って我が国の博物館が始まったとされ、東京国立博物館の出発はここに置かれる。

この後、新政府がウィーンでの万国博覧会[94]への招請を受け入れ、その準備を進めるために、1873（明治6）年、博覧会事務局が創設され、文部省博物局・博物館・書籍館・小石川薬園が併合される。ウィーンでの万国博覧会後の1875（明治8）年、そのために収集された資料などを以って内務省博物館が創設され、また文部省の博物館・書籍館、小石川薬園は分離され、再び文部省に戻った。しかし、この文部省博物館は全く資料を持たず、改めて資料収集を始めるとともに、田中不二麿[95]の主導で教育博物館として1877（明治10）年に再出発した。これが現在の国立科学博物館へとつながる。

内務省博物館は、政策的に殖産興業のための啓蒙施設として位置づけられ、内国勧業博覧会とともに、明治前期における産業化に大きな役割を果たした。動物園や植物園も伴う総合博物館といったものであった。この博物館の構想は、佐野常民がいわばそのリーダーであり、同時に、岩倉使節団の中核をなした大久保利通や伊藤博文らもリーダーであった。大久保や伊藤が欧米で実際に見聞した博物館の中で、ある意味で最も感銘を受けた英京ロンドンのサウスケンジントン博物館[96]のあり方がそのモデルとなったといわれている。

新政府は、欧米に認知され、不平等条約を解消するためにも、第一に国力を増進させることが肝要で、そのために、既存の社会の諸制度を根底から改変し、最新の技術を受け入れるとともに、次の世代を支える人材の教育に大きな努力を傾けた。その一環として、博物館の創設も位置づけられよう。したがって、こうして生まれた博物館も啓蒙施設という位置付けが強く、調査研究、継続的なコレクション形成といった点では明確な方針は確立されていなかったように思われる。この時期ではある意味で無理のないことではあるが、こうした博物館を創設していった人々は、いずれも官僚であった。田中芳男のように、本草学者伊藤圭介の弟子で、当時の博物学研究者としても傑出した存在であった者も加わっていたとはいえ、博物館の生命がコレクションとその研究であることについての認識は必ずしも強いものではなかったように見える。コレクション形成とその研究には、専任の専門家が必要であるものの、内務省博物館の場合も、教育博物館の場合も、この点では不十分と言わざるを得ないまま推移する。

最初の博物館創設の牽引車であった佐野も町田もほどなく博物館事業から離れてしまい、田中も農商務省博物局長を務めた後、退職し、貴族院議員となり、博物館の一線からは遠ざかってしまう。我が国に博物館を根付かせようとした者たちが去った後、1886（明治19）年、この内務省博物館は宮内省に移管され、帝国博物館と改称され、次第に今日の文化財系の博物館に性格転換をしていくことになる。また、文部省の教育博物館も師範学校の整備等が進んで次第にその役割を終え、上野から湯島に移って東京高等師範学校の付属博物館へと変わっていくことになる。自然科学系の博物館として本格的に再生するのは、1914（大正３）年、東京高等師範学校から独立して東京教育博物館となって以降といえる。

5. 我が国における博物館の創設事情

幕末、そして明治初年に欧米で博物館を見てきた者たちの中に、我が国にも博物館が必要と考えた者たちがいたが、当然のことかもしれないが、その考え方には、それぞれに違いがあった。細部を省略して大胆に整理してみよう。

田中芳男は、自身が本草学者・物産学者であったことから、自然科学の総合研究施設としての博物館を構想した。そのモデルは、パリのジャルダン・デ・プランテ[97]で、植物園、動物園をも含んだ総合的な自然史博物館であった。これに化学分野をも包摂しようとしたのが大坂舎密局の博物館構想である。

町田久成は、幕末に薩摩の英国留学生を引率して英国に渡っており、大英博物館やサウスケンジントン博物館を見ていたものと思われる。町田自身の個人的資質もあって、その博物館の構想は、どちらかといえば文化財の保護と展観のためのものという色彩が強いように思われる。ウィーンの万国博覧会の後、博覧会事務局から博物館が内務省に移管され、文部省には名前しか残らず、教育博物館が構想されることになったわけだが、この時に書籍館も当初は内務省に博物館とともに残された。最終的には文部省の所管に戻ることになるわけだが、町田は博物館と書籍館を一体のものとして考えていたようで、これは大英博物館が理想のモデルであったことを示している。当時の大英博物館は、次々と新たな資料が獲得されていた時期で、既に極めて手狭となっており、展示は相当に混雑していたはずである。しかしなお、自然史関係資料もサウスケンジントンに移る前であって、図書館を含む総合博物館であった。

佐野常民は、もともと軍事や産業技術系の学問をしたこともあり、富国強兵・殖産興業策の一つとして啓蒙教育施設としての博物館を構想している。英京ロンドンのサウスケンジントン

博物館をモデルと考えたようで、学問的な基礎の乏しいものにも分かる「眼目ノ教へ」を通じて啓蒙教育を実践しようとしたと考えられる。そして、博覧会を開催し、この収集品を以って本格的な博物館を実現し、その後には万国博覧会を開催するところまで進めようという考えを持っていたようである。

幕末から明治初年のイデオローグの一人であった福澤諭吉は、『西洋事情』において博物館のなんたるかを明確に説いたが、これも政府が主導、もしくは援助して大衆の教育に資することは強調しているが、研究や収集については十分な記述はない。

田中にしても、自然科学の総合博物館を構想しているものの、その組織についてはどこまで構想していたのかは、実はよくわからない。田中自身、旧来の本草学に飽き足らず、欧米の博物学（自然誌学）についての勉強に努めていることや、『博物掛図』などに見られるように、その啓蒙普及に力を注いでいるとはいえ、内務省の博物館時代にも、研究組織を作り上げるまでの仕事はなしえていない。この点では、町田も佐野もほぼ同様である。

博物館の創設に熱意を振るい、上野公園の現在地にジュサイア・コンドル設計の本館を建て、清水谷に動物園を置くまでにしたのは、これらの人々の力であることに異論はない。しかし、江戸時代の学問や社会の影響を色濃く残した人々が実現したのは、最初は物産会の延長でしかなかったし、その後も官主導で進んできた博物館は、残念ながら展覧施設としては機能したが、継続的で本格的な研究や資料収集は専任の研究者を欠いていたことから極めて弱かったといわなければならない。

こうして見ると、明治初期における博物館創設は、他の輸入された西欧の諸制度や文物と同様、必ずしも直結するような基盤があったわけではなさそうである。確かに本草学、蘭学－洋学のそれなりに分厚い蓄積があったことは事実であるものの、モノや技術をその素晴らしさに感嘆し、導入するのは、ある意味でその基盤や理論を知らずともできることであり、既に江戸期の本草学の中でも初めは中国、後には西欧の知識を、いわば日本風に消化していたことは見たとおりであるし、明治初年以来の新来のモノや技術の受容は華々しかった。

最初期の博物館が不幸であったのは、江戸時代に物産会という、相似た事象があったことかもしれない。湯島聖堂で行われた「文部省博物館」という博覧会は、錦絵にも残されているほどの盛況であったようだが、この情景はまさに寺門静軒描くところの物産会を彷彿とさせる。一方それゆえに、博覧会や博物館というものが、多くの人々に抵抗なく受け入れられたのかもしれないが、西欧の同時代の博物館とは原理的に、どことなく違ったものになってしまっていたのではないだろうかと思う。

大学制度を含む学校教育の制度が整い、欧米からのお雇い外国人によってアップトゥデイトの学問が直接教授されるようになって、江戸時代以来の諸学問のほとんどすべては、公的な形でのその継承は切れてしまった。長い伝統をもった本草学も動物学、植物学、地学等の西欧の学問パラダイムにそのまま繋がるものではなかった。大学に出仕を求められた伊藤圭介が授業を持つことはなく、小石川植物園での本草研究にとどめ置かれたことは象徴的である。良くも悪くも大学における研究と教育は、急速に西欧の学問パラダイムに沿って整備された。しかし、博物館はどうであったのかといえば、不十分ながらも学術研究官が博物館の専任に位置づけられるようになるのは明治後期から大正にかけてということになるであろう。このことが、我が国の博物館の発展の跛行性の主要な原因ではないかと考える。

注

[1] 1736（元文元）年、大阪北堀江の造り酒屋の長子として生まれる。通称は吉右衛門、名は孔恭、字は世粛、号を蒹葭堂、巽（遜）斎。1802（享和2）年没。谷文晁によって描かれた肖像画『木村蒹葭堂像』は重要文化財に指定されている。

[2] 江戸中期、大阪を代表する狩野派の画家。1680（延宝8）－1763（宝暦13）。

[3] 江戸文人画の先駆者。名は里（さと）恭（とも）。淇園は号、好んで柳里（りゅうり）恭（きょう）と名乗った。博学で多芸多才であった。江戸の柳沢藩邸に生まれるが、享保の改革による主家の転封に伴い大和郡山に移る。池大雅を見出し、中国文人画を伝えたという。

[4] 黄檗宗の僧で南蘋風の花鳥画を能くした。僧名は海眼淨光。1722（享保7）－1786（天明5）。

[5] 1723（享保8）－1776（安永5）。江戸時代文人画家の最高峰といわれる。与謝蕪村との共作「十便十宜図」、高野山の「山水人物図襖絵」、東京国立博物館の「楼閣山水図屏風」が国宝に指定されているほか、重要文化財に12件の作品が指定されている。

[6] 1723（享保8）－1790（寛政2）。大坂に在住した儒者で漢詩人。混沌詩社をおこす。

[7] 津島恒之進。1701（元禄14）－1755（宝暦4）。松岡恕庵の高弟。後述するように戸田旭山のもとで薬品会の先駆となる本草会を開いた。

[8] 1729（享保14）－1810（文化7）。松岡恕庵に本草を学び、京に私塾衆芳軒を開く。幕命により71歳で江戸の医学館教授方となり、1803（享和3）年、『本草綱目啓蒙』を著す。

[9] 俳人、画家、国学者。弘前藩家老の子として生まれるが、家を追われ、俳諧と画に志す。後、賀茂真淵に入門し国学を修める。1719（享保4）－1774（安永3）。

[10] 1725（享保9）－1808（文化5）。近江の人で、奇石収集家。名は小繁。石亭は号。『雲根志』などを表す。

[11] 儒学者。大坂の懐徳堂全盛期の学主。1730（享保15）－1804（享和4）。

[12] 1735（享保19）－1807（文化4）。京の儒学者。平戸藩松浦静山などに招かれ儒を講じた。

[13] 1747（延享4）－1793（寛政5）。尊王思想家で、林子平、蒲生君平とともに寛政の三奇人と呼ばれる。

[14] 1755（宝暦5）－1817（文化14）。儒学者で経世家。丹後宮津藩家老の子として生まれるが、後、浪人。儒学を学び、後、桂川甫三に医を学ぶ。甫周とともに暮らし強い影響を受ける。各地に遊学し経世策を説く。

[15] 758（宝暦8）－1834（天保5）。号は占春。田村藍水に本草学を学び、薩摩藩主島津重豪に仕えた本草学者。重豪の命により、白尾国柱とともに『成形圖説』を著す。

[16] 1754（宝暦4）－1836（天保9）。本多利明の音羽塾に学び、1785（天明5）年の蝦夷地調査に利明の代役として赴く。以来、前後8回にわたり北方探検に従事する。農民の出ながら、普請役にまで登る。1826（文政9）年、シーボルトの江戸参府にあたり、長崎屋を訪ね何度か会見している。この折り、間宮林蔵が調査した樺太の地図をシーボルトに与えたが、シーボルト事件への連座は免れている。

[17] 1757（宝暦7）－1827（文政10）。蘭学者。杉田玄白、前野良沢の弟子。一関藩の医師。江戸に私塾芝蘭堂を開き、宇田川玄真、稲村三伯らを育てる。『蘭学階梯』『重訂解体新書』などを著し、『厚生新編』の訳業にも加わっている。いわゆる「オランダ正月」を始めたことでも知られている。

[18] 1781（安永9）－1832（天保3）。大阪生まれの陽明学者で歴史家、思想家。主著は『日本外史』。

[19] 相国寺に住した禅僧で漢詩人。片山北海、売茶翁との交友や伊藤若冲を後援したことが知られている。池大雅の詩文の師でもある。

[20] 1675（延宝3）－1763（宝暦13）。黄檗宗の僧で煎茶中興の祖といわれる。大典顕常による『売茶翁伝』がある。

[21] 1716（正徳6）－1800（寛政12）。京の絵師で写生を基本としながらも、独特の画風を構築した。本草学の実証的傾向に影響を受けたといわれる。代表作は「動植綵絵」で、花鳥画は多いが、山水や人物は少ない。

[22] 1716（享保元）－1784（天明3）。江戸俳諧の巨匠の一人。画家としても優れ、池大雅との共作、「十便十宜図」は国宝。

[23] 1722（享保７）－1784（天明4）。儒学者、画家、篆刻家。印章学の大成者といわれる。

[24] 1734（享保19）－1809（文化6）。『雨月物語』の作者。読本作家、歌人、国学者。

[25] 1733（享保18）－1795（寛政7）。画家。写生を重視し、今日に続く日本画の円山四条派の祖。

[26] 肥前平戸藩主。名は清。静山は号。随筆集『甲子夜話』で著名。

[27] 1745（延享2）－1820（文政3）。文人画家。

[28] 1749（寛延2）－1823（文政6）。太田直次郎。南畝は号、蜀山人とも号す。天明期の文人作家で、狂詩・狂歌も能くする。狂詩では寝惚先生、狂歌では四方赤良。幕府の官吏としては勘定支配にまで登る。大坂銅座に赴任した折、蒹葭堂や上田秋成と交遊を持った。

[29] 1747（延享4）－1818（文政元）。絵師で蘭学者。浮世絵師としては鈴木春重を名乗る。我が国洋風画の開拓者の一人。日本最初の銅版画の制作も行っている。

[30] 1767（明和4）－1833（天保4）。京の絵師で陶工。

[31] 1777（安永6）－1835（天保6）。南画家。豊後岡藩儒医の子に生まれる。医業より学問と画に傾き、37歳で致士し、後半生は画業と著作に専念する。画論に『山中人饒舌』がある。

[32] 1763（宝暦13）－1841（天保11）。江戸生まれで、江戸南画の大成者。狩野派に学び、後、北宋画、円山派のみならず朝鮮や西欧の絵にも学び、江戸南画を完成させた。松平定信に仕え、その引退まで定信付の近習を務める。

[33] 1764（宝暦14）－1826（文政9）。松前藩家老。宋紫石、後に円山応挙に師事し画を学んだ。アイヌの酋長たちを描いた「夷酋列像」が有名。評伝としては、中村真一郎『蠣崎波響の生涯』新潮社1989が詳しい。

[34]『本草綱目』には1596（万暦24）年、金陵で刊行された初版（金陵本）、1603（万暦31）年の第２版、江西巡撫署刊本（江西本）、1606（万暦34）年の第３版（湖北本）が知られている。

[35] 1583（天正11）－1657（明暦3）。出家後の号は道春。

[36] 斉の陶弘景が、復元編集した『神農本草経』に自著を併せ編注したものが『神農本草経集注（しんのうほんぞうけいしっちゅう）』である。『本草集注』と略されることが多い。成立は6世紀ごろといわれる。

[37] 7世紀中ごろの659年、唐の蘇敬が『本草集注』を改訂増補したもの。本文・目録各20巻、薬経7巻、収載する薬品約850種。

[38] 平安時代末に舶載されたと考えられる宋代に編纂された『大観本草』を活用するための本草辞典。一名『節用本草』とも呼ばれる。

[39] 1561（永禄4）－1619（元和5）。江戸期儒学の祖。

[40] 淀藩の典医稲生恒軒の息。江戸に1655（明暦元）年に生まれる。大阪の本草学者福山徳潤、京都の儒学者伊藤仁斎に学び、1693（元禄6）年、加賀金沢藩主前田綱紀に儒者として召抱えられる。綱紀の命を受け、浩瀚な博物書『庶物類纂』（正・続各1000巻の予定）の編纂に着手する。没年の1715（正徳5）年までに362巻を書き上げるが、その死によって『庶物類纂』の編纂は中断する。後、徳川吉宗の命で、弟子の丹羽正伯らが追補を行い、計1000巻が完成する。京都に居住し、野呂元丈、丹羽正伯、松岡恕庵らを育てる。我が国の本草学の始祖ともいうべきで、京都本草学派は、この学統といえる。

[41] 1698（元禄11）年、『広益本草大成』を編む。

[42] 1630（寛永7）－1714（正徳4）。藩命による『黒田家譜』『筑後国続風土記』の編纂でも知られる。著書の多くは退役後の晩年のものである。もっとも著名な書は教育書ともいうべき『養生訓』であろう。

[43] 1666（寛文6）年刊行の中村惕（てき）斎（さい）『訓蒙圖彙（きんもうずい）』は、天文・地理・人体・衣服・器用（道具）・動物・植物の絵入り解説本である。本草学書とは異なるものだが、子供向けに編纂された初歩的・通俗的な名物学の書といえる。その著しい特徴は、絵入り教科書とでもいうべきもので、コメニウスの『世界図会』と対比できるともいえよう。ケンペルの『日本誌』の挿絵には、本書から模刻された図がある。

[44] 1713（正徳3）年刊の寺島良安の『倭漢三才圖会』は、明の王圻の『三才圖会』の内容を縮約し、日本の自然・文物に関する説明を大幅に追加したものである。江戸時代を通じ版を重ね、明治に入っても刊行されているロングセラーである。武士階層にとどまらず、農民層や町人層にも広く読まれたことが分かる。

[45] この安貞の著書以外にも多くの農書があるが、具体的な理解を助けるために、多くは図入りである。『訓蒙圖彙』や『倭漢三才圖会』などと同様、その特徴は、経験的であり、現実主義的であり、啓蒙書である。

[46] 小野必大が本来の氏名。人見姓は通称。中国風に野必大とも名乗る。幕府医官の子として生まれ、これを継ぐ。食物本草学者といってよい。『本朝食鑑』は、この分野の著作の最高峰といわれる。

[47] 紀州の医師。

[48] 1695（元禄8）－1777（安永6）年。名は正勝、佐平次は通称。伊勢の出身で、吉宗に随行して江戸に下る。本丸奥御庭方（御庭番）。上野益三の博物誌年表（上野　1973）によれば、実に頻繁な数多くの採薬行の記録がある。

[49] 1691（元禄4）－1756（宝暦4）年。伊勢松坂の医師、本草学を稲生若水に学ぶ。

[50] 1694（元禄6）－1761（宝暦11）年。伊勢の生まれで、京で儒と医と本草を学ぶ。後、青木昆陽とともに蘭語も学ぶ。

[51] 陸奥盛岡の人で、延宝年間に乗船が中国に漂流し、そこで医と本草を学ぶ。生年は不明で、没年は1753（宝暦3）年といわれる。

[52] レンベルト・ドドエンス（1516-1585）、現在のベルギーの生物学者。我が国ではドドネウスと呼ばれることが多い。その『草木誌』（初版1608年）の第2版（1618年刊）が、時の長崎商館長ツァハリアス・ワーヘナール（ワーグナー）によって1659年、幕府に献上される。元丈は江戸参府の長崎商館長らにただし、このドドエンスの『草木誌』を翻訳し、『阿蘭陀本草和解』（1742（寛保2）－1750（寛延3）年）を著わすが、薬効を中心とした部分訳にとどまる。これについて西村三郎は、元丈のみならず、通詞の蘭語能力からみると、原著の理論的な部分や、各項目の詳細な内容を十分に翻訳することには相当に無理があったと考えられること、通詞のすべてが本草に関する基礎知識を持ち合わせていたわけではないこと、同時に、元丈自身の関心が個別の薬効を中心とするものであって、植物学の理論や体系への関心が薄かったことが考えられるという（西村　1999）。

[53] 丹羽正伯、野呂元丈とともに稲生若水の弟子といえる。

[54] 1718（享保3）－1776（安永5）年。島津重豪に依頼され『琉球産物志』を編む。弟子には、子の田村西湖、栗本丹州の他、平賀源内、中川淳庵などがいる。

[55] 1696（元禄9）－1769（明和6）年。備前岡山藩士鈴木氏の息として生まれ、母方の姓を継ぐ。医を業とし、大坂鰻谷に薬園「百卉園」を開く。

[55] 1745（延享2）－1793（寛政5）年。田村藍水の長子。名は義之、通称元長、西湖は号。幕府医官。

[57] 1786（天明6）－1842（天保13）年。江戸の生まれ。小野蘭山最晩年の門人。

[58] 1805（文化2）－1870（明治3）年。阿部将翁の曾孫。岩崎灌園・曾槃に学ぶ。平野満　2002「幕末の本草学者阿部喜任（榛斎）の年譜」『参考書誌研究』56, 1－60に詳しい。

[59] 1778（安永7）－1859（安政6）年。儒医の息として生まれ、小野蘭山に本草を学ぶ。京に医を業とする傍ら、家塾「読書室」を開く。榕室はその息。

[60] 1797（寛政9）－1860（万延元）年。尾張藩医浅井家5代目。

[61] 1762（宝暦12）－1821（文政4）年。薩摩鹿児島藩士。国学者。

[62] 赭鞭会の成立と活動の展開については、平野満　1996「天保期の本草研究会『赭鞭会』」『駿台史学』98、1－47に詳しい。

[63] 1756（宝暦6）－1834（天保5）。田村藍水の次子。幕府医官栗本氏の養子となる。幕府医官。

[64] 1785（天明5）－1868（明治元）年。所領2000石の旗本。自邸に多くの舶来植物を植えた。『舶上花譜』はその図譜。

[65] 1766（明和3）－1860（万延元）年。甲府勤番の旗本、後、新番となり江戸。

[66] 磯野直秀・田中誠　2010「尾張の嘗百社とその周辺」『慶応義塾大学日吉紀要・自然科学』47、15－39に、その沿革、活動、メンバー等は詳しい。

[67] 1779（安永8）－1833（天保4）年。尾張藩士。小野蘭山に本草を学び、尾張本草学の中心となる。藩の薬園の監督を務め、自邸にも植物園をつくる。主著は『物品識名』。

[68] 1796（寛政8）－1883（明治16）年。尾張名古屋の町井西山玄道の長男。大河内家の養子に入り、後、奥医師。1852（嘉永5）年、実弟、伊藤圭介とともに尾張藩で種痘を行う。

[69] 1803（享和3）－1901（明治34）年。尾張名古屋の町医師西山玄道の次男。水谷豊文に本草を学び、後、シーボルトにも学ぶ。1861（文久元）年、幕府の蕃書調所物産所出役、1870（明治3）年、明治政府のもとで大学南校に出仕、後、文部省。1881（明治14）年、東京大学教授、1888年、日本初の理学博士。

[70] ケンペルは1651年、ドイツ北部のレムゴーに生まれ、ハーメルン、ダンツィヒなどで学び、1681年、スウェーデンのウプサラのアカデミーに移り、スウェーデン国王カール11世がロシア、ペルシャへ派遣した使節団に医師として随行する。ペルシャで使節団と別れ、オランダ東インド会社船医となり、バタヴィアに渡る。その後、長崎商館付の医師としてシャムを経て日本に渡る。1692年、ヨーロッパに戻り、ライデン大学で医学博士の学位を取得し、北ドイツのリーメで医院を開業する。ロシア、ペルシャ、シャム、日本で収集した資料の研究を進めるが、1716年死去。『日本誌』はケンペルの遺品とともに、その草稿「Heutiges Japan（今日の日本）」を入手したハンス・スローンにより、1727年英語版で出版された。このケンペルの遺品は、現在、大英博物館に所蔵されている。後にフランス語、オランダ語版が刊行されている。フランス語版はディドローが『百科全書』の日本関係項目の底本として使ったことが明らかで、当時の知識人に日本を強く印象付けたものであった。1801（享和元）年、オランダ語版を底本として志筑忠雄はその一部を翻訳し、『鎖国論』を上梓する。鎖国という言葉の起源である。ケンペルの草稿のオリジナル版は2001年に刊行されている。

[71] 1743年、スウェーデン生まれ。ウプサラ大学でリンネに医学と博物学を学ぶ。リンネの意向を受けて日本の動植物調査に派遣されたという。オランダ東インド会社の医師となり、喜望峰でのオランダ語の習得と博物学調査の後、1775年（安永4）年、来日。医師としては、通詞吉雄耕牛らに昇汞（塩化第2水銀）を使った梅毒治療法を教えたことが大きな貢献といえる。帰国後ウプサラ大学植物学教授、学長を歴任する。1828年没。

[72] 1798（寛政10）－1846（弘化3）年。大垣藩医江沢養樹の長男として生まれ、津山藩医宇田川玄真の養子となる。植物学関係では、「細胞」や分類概念の「属」という用語を造語する。『舎密開宗』など舎密（化学）研究書の翻訳も多く、「酸素」、「水素」、「窒素」、「炭素」、「元素」、「酸化」、「還元」、「溶

解」、「分析」等の学術用語を造語する。

[73] 1720年、オランダ生まれの医師で博物学研究者。著書『自然誌』は、リンネの『自然の体系』第10版および12版のオランダ語訳であるが、単なる翻訳ではなく、自身の研究成果も盛り、原著にはほとんどない植物図約300枚が付されている。我が国におけるその受容に関しては、平野満　2002「近世日本におけるハウトイン『自然誌』の利用」『明治大学図書館紀要』6，82－102に詳しい。1798年、アムステルダムに没す。

[74] 1756（宝暦5）－1798（寛政9）年。江戸詰の津山藩医。杉田玄白、前野良沢らと交遊を持ち、蘭方医となる。

[75] 1770（明和6）－1835（天保5）年。伊勢に生まれる。安岡璘。大槻玄沢の芝蘭堂で学ぶ。後、津山藩医宇田川家の養子となり宇田川玄随の後を継ぐ。大槻玄沢の後、江戸蘭学の中心となる。榕庵を養子とし、宇田川家の後を継がせる。

[76] 1633年生まれ、1712年没。1709年、リヨンで Dictionnaire Œconomique（日用百科事典もしくは家庭百科事典）を刊行。

[77] 1799年から1817年まで、短期間バタヴィアに戻ったことはあったが、長崎商館に滞日。この間、1803年から1817年まで商館長を務める。オランダ本国は、ナポレオン戦争によってフランスに占領・合併され、オランダ東インド会社も解散した時期である。東南アジアのオランダ領はフランスに敵対したイギリスが押さえた。こうした情勢の中、滞日中に1808年のフェートン号事件、イギリスによるオランダ領東インドの制圧に遭うが、1815年のオランダ再独立まで出島を守る。この時期、世界で唯一オランダ国旗が翻り続けたのは長崎の出島だけであった。

後述するように、稲村三伯が訳出編纂した『波留麻和解』はあったが、ドゥーフも同じ蘭仏辞典をもとに蘭日辞典『ドゥーフ・ハルマ』を編纂している。

[78] 1937（昭和12）年になって刊行された。

[79] ドイツのヴュルツブルクに、1796年に生まれる。ヴュルツブルグ大学で医学を学び、卒業後開業するが、東洋の研究を志し、オランダ軍医となり、オランダ東インド陸軍病院の医官となる。1799年に、オランダはフランスに占領合併され、当時、既に東インド会社は解散しており、バタヴィア東インド政庁派遣の出島商館員として来日する。東インド総督ファン・デル・カペレンは、シーボルトに対し、日本の資源・産業・人口・地理などに関する最新情報の入手を依頼する。シーボルト事件の伏線はここにあるといえる。シーボルトは帰国後、『日本』（1832-52）、『日本動物誌』（1830-50）、『日本植物誌』（1835－42）を著す。1858（安政5）年、日蘭通商条約が結ばれ、シーボルトに対する追放令も解除されたことから、翌年、オランダの貿易会社顧問として再来日し、1861（文久元）年には幕府の顧問となるが、翌年辞して帰国。1866年、ミュンヘンで没す。

[80] 1786（天明6）－1838（天保9）年。陸奥の人。大槻玄沢に学び、江戸で蘭方医を開業。後、シーボルトに学び、再び江戸で医業に就く。

[81] 1801（寛政12）－1871（明治4）年。肥前佐賀の人で、シーボルトに学び、佐賀藩で牛痘種痘法を行う。1858（安政5）年、大槻俊斎らとともに江戸にお玉が池種痘所を開く。この種痘所は後に幕府の医学所となり、明治新政府のもとで大学東校、東京医学校、東京大学医学部を経て帝国大学医学部となる。幕府の医学館は伝統的な漢方医よりなり、医学所は蘭方医からなるもので別の組織であった。

[82] 1804（文化元）－1862（文久2）年。シーボルト事件に連座し、長崎を追放され、郷里に戻って開業する。シーボルトからその娘イネの養育を託される。開明派の大名であった宇和島藩主伊達宗城には重用されたという。

[83] 室町期以来の書院飾りの伝統の中では、「会所」と呼ばれる唐物の展示場が存在した。会所はまた、和歌・連歌の会を催す場所としても存在し、ここでは身分の差を問題にせず、いわゆる無縁の空間で

あった。しかし、江戸時代までには、こうした会所は姿を消しているようである。

[84] 1758（宝暦8）－1811（文化8）年。鳥取の町医松井如水の子として生まれ、藩医稲村家の養子となる。福岡、長崎、京で医を修業の後、江戸で大槻玄沢に学ぶ。

[85] 1626-1698。文法学者で辞典編纂者。

[86] オランダ、ユトレヒトの出版業者。

[87] 臺由子によれば、臺由子（2010）「蘭語におけるクンストカマーをめぐって」『全日本博物館学会第36回大会研究発表要旨』においては稲村三拍『波留麻和解』の訳語を「圖畫の府」としたが、精査の結果これは誤りで、「図書」と考えられるという。「書」にあたる文字は、「昼」の字の下の「一」を欠いたようなもので、正確には該当する文字はないようである。下側は「且」の一部が欠けたものとすれば、読みは「しょ」と考えられることから、この文字は「書」を意味するものであろうということである（臺由子よりの私信）。なお、臺によれば、現在、当該の論文を執筆中とのことで、その中でより明確な考察が発表されるものと思われる。

[88] 1799（寛政11）－1863（文久3）年。津山藩士、後、幕臣。江戸で宇田川玄真に学ぶ。幕府天文台で翻訳に従事し、後、蕃書調所教授となる。

[89] 帝国図書館司書であった朝倉無声（1877（明治10）－1926（昭和2）年）による『見世物研究』（春陽堂、1927）に詳しい。なお、『見世物研究』以外に朝倉が各種の雑誌に掲載した論考を集めて川添裕の編集による『朝倉無声　見世物研究姉妹篇』（平凡社、1992）も参考となる。

[90] パリで行われた2度目の万国博覧会（Exposition Universelle de Paris 1867）。会期は1867年4月1日～11月3日。参加42ヶ国、総入場者1500万人という。時の駐日フランス公使レオン・ロッシュ（Michel Jules Marie LeonRoches）の働きかけで幕府が、この博覧会に参加することとなり、将軍慶喜の弟、清水家当主の徳川昭武をいただく出品使節を派遣する。田中芳男はその一員。佐賀藩の出品には佐野常民が随った。この時薩摩藩は、フランス貴族シャルル・ド・モンブラン伯爵（Charles Ferdinand Camille Ghislain Descantons de Montblanc）を代理人として幕府とは別に一独立国として参加出品した。モンブラン伯爵は薩摩藩の密航留学生たちの世話をしていたこともあり、薩摩藩に働きかけて万博への参加を実現させたといえる。これは伯爵の外交官としての野心の表れであろう。薩摩藩は家老岩下方平等を派遣するが、滞英中の町田久成もその一員となる。

[91] 1838（天保9）－1916（大正5）年。現在の長野県飯田の出身。名古屋に出て伊藤圭介に医、本草、洋学を学ぶ。1862（文久2）年、伊藤圭介に従って江戸に下り、翌年に蕃書調所に出仕。1867（慶応3）年、パリの万国博覧会に、幕命によって収集した昆虫標本等を携え出張。帰国後、明治新政府のもとで、開成所御用掛となり、大坂舎密局建設に携わる。パリのジャルダン・デ・プランテをモデルとした自然科学の大博物館として構想するが、これは実現しなかった。文部省博物館、墺国博覧会事務局、内務省物産局、内務省勧業寮、農商務省博物局と、明治初期の博物館行政に一貫して携わった。退職後、元老院議官、貴族院議員。

[92] 1838（天保9）－1897（明治30）年。薩摩藩士、明治維新後は外務官僚、文部官僚。幕末に薩摩藩留学生を連れ英国に渡航、帰国後、新政府のもとで外国事務掛、外国官判事、外務大丞を歴任、1870（明治3）年、大学大丞となり、田中芳男らと博物館創設に力を注ぐ、また廃仏棄釈による文化財の破壊、忘失を憂い、「古器旧物保存方」の太政官布告を出すことに尽力する。1876（明治9）年、内務省博物館の初代館長を務める。後、僧籍に入り、滋賀の三井寺光浄院住職となる。

[93] 1823（文政5）－1902（明治35）年。佐賀藩士下村三郎佐衛門の子に生まれ、藩医佐野家の養子となる。緒方洪庵の適塾、花岡青洲の春林軒塾、伊藤玄朴の象先堂塾などで学び、佐賀に戻って精錬方を務める。後、長崎海軍伝習所に参加し、藩の海軍所頭取となり、1867（慶応3）年のパリの万国博覧会に藩品を持って出張。軍事、産業、造船等の西欧の技術を視察。帰国後、新政府で海軍創設に携わるが、

罷免され、工部大丞として洋式灯台建設に携わる。1873（明治6）年、墺国博覧会事務局副総裁となり、ウィーンの万国博覧会の実質的責任者を務め、ウィーンに出張。そのまま駐オーストリア大使。ウィーン万国博覧会の報告書を含め、博物館創設の必要性をたびたび建言する。西南戦争にあたっては、パリで知った国際赤十字の活動から受けた感銘から、博愛社（後の日本赤十字社）を創設する。1879（明治12）年、美術団体、「龍池会」の会頭に推される。その後は、大蔵卿、元老院議長、枢密顧問官、農商務大臣などを歴任し、博物館行政からは遠ざかる。

[94] フランツ・ヨーゼフ皇帝在位25年を記念して開催された万国博覧会（Weltausstellung 1873 Wien）。1873年5月1日～10月31日までオーストリア＝ハンガリー帝国の首都ウィーンのプラーター公園で開催。テーマは「文化と教育」。参加35ヶ国、入場者726万人。日本政府が初めて公式参加し、日本館が建設された。

[95] 1845（弘化2）－1909（明治42）年。1871年、文部大丞。岩倉遣欧使節団に文部理事官として随行、アマースト大学（アメリカ）に留学中の新島襄を通訳兼助手とし、欧米の学校教育を見聞する。帰国後、欧米教育制度を紹介した『理事功程』15巻を著す。1874年、文部大輔。文部省学監ダヴィッド・モルレーとともに、教育博物館を創設する。

[96] 1851年のロンドン万国博覧会の収益や展示品をもとに、1852年にピカデリー・サーカス近くに産業博物館として開館し、1857年、サウス・ケンジントンに移転し、工芸技術学校などを付設した大規模博物館となったもので、ヴィクトリア朝の産業・技術の発展を背景に、イギリスの工芸品や産業製品の質を高め、工業の振興を図るため、製造業の労働者たちにデザインの重要性を啓蒙することを目指した博物館として設立された。今日、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館と科学博物館という、二つの隣接した博物館となっている。こうした、殖産興業、デザイン発展のために博覧会を開催することや博物館を作るという考えは1830年代から女王夫君のアルバート公やサー・ヘンリー・コールらが構想していたものである。

[97] 現在の国立自然史博物館（le Muséum national d'histoire naturelle）。この博物館の発足は、ルーヴル宮の公開、フランス記念物美術館の創設とともに、フランス革命中の1793年の国民公会（la Convention）の政令による。その起源は、1635年にフランス国王ルイ13世が創設し、王の侍医たちにより監督運営された「王立薬草園」（Jardin royal des plantes médicinales）。しかし、1718年、ルイ15世の勅令によって医学的な機能は排除されて、博物学、自然誌の研究に集中することになったので、単に「王立庭園」（Jardin du Roi）と呼ばれるようになる。18世紀後半期、この庭園は指導的な啓蒙思想の博物学者の一人ビュフォン伯ジョルジュ＝ルイ・ルクレルの監督下にあって国際的な名声を獲得した。1793年以来、植物園にとどまらず、動物園も持ち、また複数の自然史系博物館からなる大規模自然史博物館として発展している。

引用・参考文献

朝倉無声　1927　『見世物研究』春陽堂、東京

磯野直秀・田中誠　2010　「尾張の嘗百社とその周辺」『慶応義塾大学日吉紀要・自然科学』47、慶應義塾大学、横浜

上野益三　1973　『日本博物学史』平凡社、東京

上野益三　1991　『博物学者列伝』八坂書房、東京

川添裕（編）　1992　『朝倉無声　見世物研究姉妹篇』平凡社、東京

臺　由子　2010　「蘭語におけるクンストカマーをめぐって」『全日本博物館学会第36回大会研究発表要旨』3－4、全日本博物館学会、東京

A hypothesis on the Background of Museum Origin in Japan

YAJIMA Kunio

Through 15th to 18th Century Europe, there were a lot of private collections, so called Cabinet or Kunstkammer. Almost of these collections are directly turn to the modern museums after the latter half of 18th Century.

At the same age in Japan, middle to late Edo period, there were almost the same social phenomena. There were many private collections mainly based on the Honzo-Gaku(closely resemble to the natural history) which were compared to the Cabinets or Kunstkammer, and also these collectors and Honzo lovers were formed an academic groups which compared to the Academy of the western world.

Japan was closed the door to the western world without Netherland at that age. So, the new knowledge of western world had been brought from Dejima of Nagasaki by Dutch. Many physicians, surgeons and also Honzo scholars were studying Dutch and Dutch scientific books. But they could not get the collect image of the cabinet, kunstkammer and museum. Through that age, there was no museum or museum like institution.

The first museum in Japan was founded by the Meiji Government in the beginning of Meiji Era. The key persons of that were Yoshio TANAKA, Hisanari MACHIDA and Tsunetami SANO. TANAKA was a Honzo-Ka(natural historian). MACHDA wanted to preserve the Japanese cultural properties. SANO aimed at the civilizing industries. The first Japanese museum was established as an enlightenment institution for the people. Their hopes were come true but not perfectly. It had not clear organization of scientists, and also clear image of collection managements.

In this paper, I will extend some sketch of the social and academic background of that situation.